

# 白川静のことば

《27》



金子都美絵・画

莊子はしばしば、真と僂とを以て、現実を超えた実在の世界を説いた。真人とは道の究極に達したものであり、その道の究極にあるものは真宰である。真人の世界は時空を超えるものであった。時空を超えるものを、僂という。〔中略〕 僂とは屍の坐するものを、左右から手を加えて抱き、これを他に遷している形である。葬屋に収めるために、ときには背に負うて走ることもある。

〔中略〕

人はみな、永生をねがう。思えば生より死喪の礼にいたるまで、すべての儀礼がみな永生への祈求を含めて、生命の思想に連なるといえよう。しかしついに、その永生をうるものはない。またその永生への希求は、真なる実在への超挙、永遠の世界への僂去という形で表現されるのであるが、真とはもと顛死の人であり、僂とは屍主を遷すことにはすぎぬとすれば、それはまことにはかない祈求であつたというほかない。

漢字の世界は、そのような運命をになう人間存在のあらゆる姿相を、古代的な思惟と習俗とを背景としながら、うつつ出している。

『漢字の世界2』平凡社ライブラリー p298~302)